

佳作

## 「ひめゆりの塔」の前で

茨城県 結城市立城南小学校五年 五十嵐 芽生

ひめゆりの塔の前で静かに手を合わせました。その時となりには私のおばあちゃんが突然こう言いました。

「おばあちゃんの小さい時、東京大空しゅうでお父さんにおんぶされて、落ちないようにしがみついて走って走って、後ろから火が追いかけて来て、こわくてこわくて背中が熱くて熱くて、今でもあのこわさは忘れない。」

と言いました。お話にでも出てくるような話で、おばあちゃんがそんな目にあっていることなんてちっとも知りませんでした。

なぜいつもそういう話は、しないのと聞いたところ、おばあちゃんは、答えません。

よほど、悲しい思い出なんだろうと思ったたら涙が出ました。

「おばあちゃんはどうして生きていけるけれど、ひめゆりさんはみんな死んでしまった。看護婦さんとして病院で一生けんめいはたらいていたけど、ぼつくうこうで死んでしまった。二百人以上死んでしまったんだよ。まだみんな十才代の若い女の子ばかりだったんだよ。」

と教えてくれました。

私は、なんとも言えない気分になりました。

戦争については、イラク戦争のことなどテレビで見知っているつもりだったし、遠い世界での出来事だと思っていました。

昔、日本でもこのような悲しいことが起こり、うちのおばあちゃんのように、つらい思いをした人がたくさんいることを知り、びっくりました。沖なわ旅行から帰り戦争のことを書いた本をいろいろ読んでみました。『お星さまのレール』、『おとつきび畑の唄』、『いのちの重さを伝えた』、『アンネ・フランク』などです。

みんな、びっくりするようななかみでした。私の今の生活では考えられないようなつらい体けんがいつばい書いてありました。

そんな中でも、なぜか明るいところがあり、一日一日を一生けんめい生きている人達のすがたがありおどろいたのと、私たちは、このような体けんをしたことを忘れてはいけないと思いました。

今年は、戦争が終って六十年がたったようです。赤んぼうだった私のおばあちゃんもおばあちゃんになりました。このまま、戦争のない安心してくらせる日が続いてほしいと思います。

そのためには、このような体けんを忘れないように伝えていくことが必要だと思います。いつか結こんして生まれてくる私の子供にも必ず、おばあちゃんの体けんを話してあげようと思います。

そして、おばあちゃんには、いつまでも長生きしてほしいと思います。

